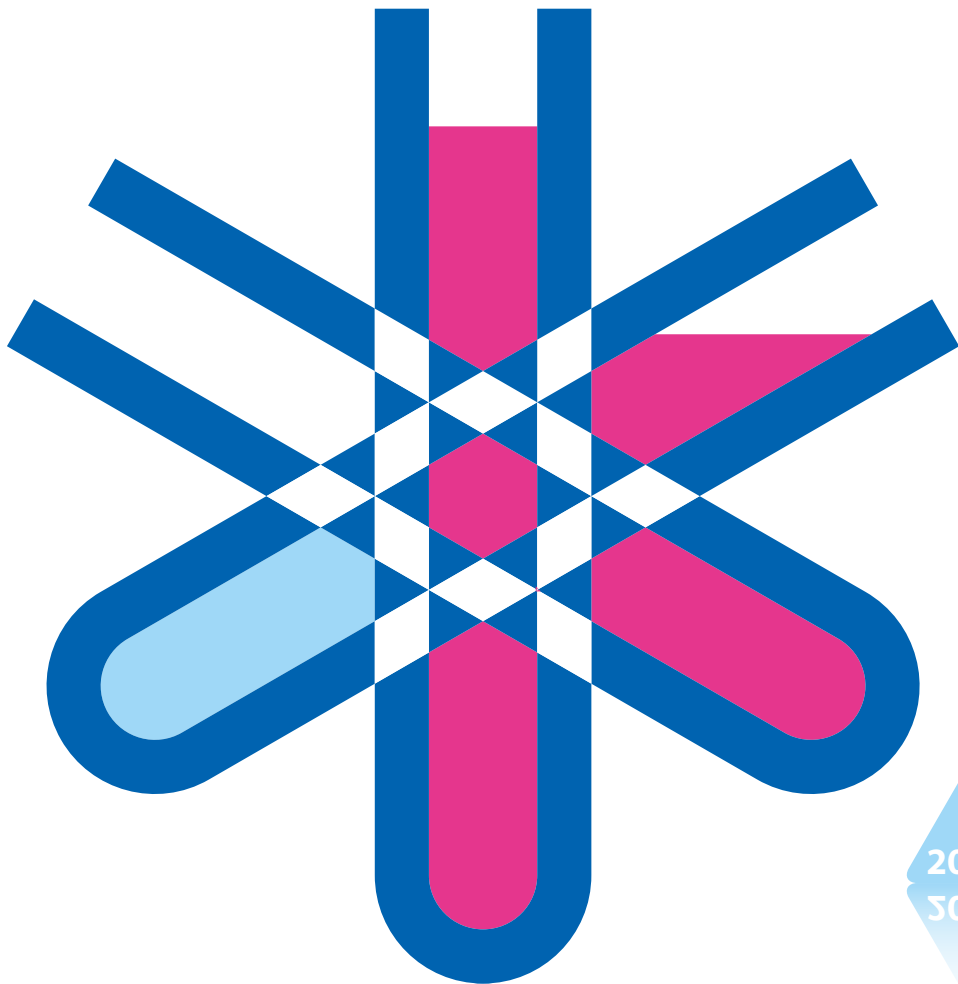


横查情報月報



横浜市衛生研究所

令和6年4月号 目次

【検査結果】

| | |
|---|---|
| 医動物・種類同定検査結果（令和5年10月～令和6年3月） | 1 |
| カルバペネム耐性腸内細菌目細菌（CRE）感染症のまとめ －2023年分離株について－ | 4 |
| 食品中の放射性物質検査結果（令和5年度） | 7 |
| 食品中のアフラトキシン検査結果（令和5年度） | 8 |
| 食品中の動物用医薬品検査結果（令和5年11月～令和6年2月） | 9 |

【情報提供】

| | |
|-----------------------------|----|
| 衛生研究所ウェブページ情報（令和6年3月） | 11 |
|-----------------------------|----|

【感染症発生動向調査】

| | |
|----------------------------|----|
| 感染症発生動向調査報告*（令和6年3月） | 12 |
|----------------------------|----|

* この記事では主に、医療機関向けの情報を提供しています。

感染症発生動向調査は感染症法に基づく国の事業です。本事業に関する詳細は、「感染症発生動向調査とは」（下記URL）をご参照ください。

<https://www.city.yokohama.lg.jp/kurashi/kenko-iryo/eiken/kansen-center/doko/systemgaiyo.html>


医動物・種類同定検査結果（令和5年10月～令和6年3月）

医動物担当では、人の健康を害し、人に不快感を与える昆虫、ダニ、寄生虫等の試験・調査・研究を行っています。

その中の一つとして、各区福祉保健センター、各市場検査所、事業者などの依頼を受け、昆虫類を中心とした種類同定検査を行っています。昆虫類の種類を同定することによって、発生源、発生時期、人に対する害などが分かると、効果的な対策を立てることにつながります。

令和5年10月から令和6年3月の6か月間の種類同定検査報告件数は、昆虫類2件（ハチ目、ゴキブリ目）、その他の節足動物7件（ダニ目1件、クモ目6件）でした。

検査結果の詳細は以下のとおりです。

| 相談内容・発生状況等 〈相談月〉 | 写真 (状態、体色、大きさ) | 同定結果 | 生態・その他 |
|---|--|---------------------|---|
| 台所のガスステープル周辺に大量のアリがみられる。 〈10月〉 |  成虫、働きアリ(マイナーワーカー)、褐色、約3mm | オオズアリ (ハチ目) | 裸地、林内等に生息し、大きなコロニーを形成する。オオズアリ属の働きアリ階級は顕著な2型を示し、大型の兵アリ(メジャーワーカー)、と小型の働きアリ(マイナーワーカー)がいる。 日本産の種は基本的に土中営巣性であるが、その場合でも石下、倒木下、樹木根ぎわ、塀や壁ぎわを好む。朽木中に営巣することもある。 成虫はアブラムシの甘露や花蜜を好み、ハチ蜜などのトラップに集まりやすい。幼虫の餌は、昆虫類をはじめ、地表性の小動物である。 |
| 事務所でトコジラミのような小さな虫をみつけた。 〈3月〉 |  幼虫、黒褐色、約4mm | ヒメクロゴキブリ (ゴキブリ目) | 野外種。樹上性で樹木の葉や樹皮で見られる。越冬態は幼虫で、ケヤキなどの樹皮下で冬越する姿が観察されている。 |
| かゆみを伴う発疹があり、フローリングにダニのような虫がみられた。 〈11月〉 |  成虫、乳白色、約0.7mm | イエダニ (ダニ目) | 雌成虫は未吸血時には、体長約0.7～1.0mmで白色から褐色であるが、吸血すると1～1.3mmに膨満して、赤黒い色を呈する。本来の宿主はネズミであるが、人も頻繁に吸血する。本種に刺された場合、激しい痒みを伴う小発赤・皮疹を起こす。 |

| 相談内容・発生状況等 〈相談月〉 | 写真 (状態、体色、大きさ) | 同定結果 | 生態・その他 |
|--------------------------------------|--|------------------|--|
| 公園の倉庫内でクモを発見した。 〈10月〉 |  <p style="text-align: right;">背面</p> | セアカゴケグモ (クモ目) | 基本的に攻撃性はないが毒を持っており、外来生物法に基づく特定外来生物に指定されている。 体色は黒く、背面中央部に赤い縦長の斑紋、腹面にゴケグモ類特有の赤い斑紋(砂時計型)がみられる。※1 |
| |  <p style="text-align: right;">腹面</p> | | |
| | 雌成虫、黒色、背面に赤い斑紋、腹面に砂時計型の赤い斑紋あり、約10mm | | |
| 公園の遊具及びベンチで複数のクモ及び卵のうを発見した。 〈10月〉 |  | | |
| | 雌成虫、黒色、背面に赤い斑紋、腹面に砂時計型の赤い斑紋あり、約9mm | | |
| |  | | |
| | 幼虫、黒色、背面に赤い斑紋、腹面に砂時計型の赤い斑紋あり、約5～6mm | | |
| | | |  |
| | | | 卵のう、乳白色、約10mm |

| 相談内容・発生状況等 〈相談月〉 | 写真 (状態、体色、大きさ) | 同定結果 | 生態・その他 |
|--|--|-----------------------|---|
| <p>自転車のチェーンにクモと卵のうが付着していた。 〈3月〉</p> |  <p>背面</p> <p>腹面</p> <p>雌成虫、灰褐色、腹面に砂時計型の赤い斑紋あり、約8mm</p> | <p>ハイイロゴケグモ (クモ目)</p> | <p>セアカゴケグモと同様に、基本的に攻撃性はないが毒を持っており、外来生物法に基づく特定外来生物に指定されている。体は褐色、灰色または黒色で個体差がある。腹部背面の正中線上に斑紋がある。腹面にゴケグモ類特有の赤い斑紋(砂時計型)がみられる。卵のうは、ハイイロゴケグモ特有の金平糖状の形をしている。全世界の熱帯、亜熱帯、温帯の一部に分布する。※1</p> |
| <p>公園内でハイイロゴケグモの卵のうをみつけた。 〈3月〉</p> |  <p>卵のう、乳白色、金平糖状 約9mm</p> | | |
| <p>公園の倉庫内でクモを発見した。(ゴケグモ属と疑われ持ち込まれた。) 〈10月〉</p> |  <p>成虫、灰褐色、約7mm</p> | <p>ヒメグモ科の一種 (クモ目)</p> | <p>ヒメグモ科に属するクモ類は、体長1.3~30mm、形態的にも生態的にもさまざまなタイプを含み、空間に造網する種が多い。なお、腹面にゴケグモ類特有の赤い斑紋(砂時計型)はみられなかった。</p> |
| <p>公園内でハイイロゴケグモのようなクモをみつけた。 〈3月〉</p> |  <p>成虫、黒色、約5mm</p> | | |

※1 横浜市内で確認されたゴケグモ属については、以下のウェブページに掲載されています。

【参考】ゴケグモに注意

<https://www.city.yokohama.lg.jp/kurashi/sumai-kurashi/seikatsu/kokyo/gaichu/seakagokegumo.html>

(横浜市医療局ウェブページ)

【 微生物検査研究課 医動物担当 】

カルバペネム耐性腸内細菌目細菌 (CRE) 感染症*のまとめ

—2023年分離株について—

カルバペネム耐性腸内細菌目細菌 (carbapenem-resistant Enterobacterales : CRE) は、抗菌薬が効かない細菌、いわゆる薬剤耐性菌の一種で、国際的にも人類にとって脅威になると考えられています。

CREがなぜ脅威になるかという点、腸内細菌目の細菌による感染症に使用される重要な抗菌薬であるβ-ラクタム系(ペニシリン系、セフェム系、カルバペネム系など)の抗菌薬がほとんど効かず治療することが難しいということ、その耐性遺伝子がプラスミド上に存在し、異なる菌種に拡散していくことなどがあげられます。

CRE感染症は、国が実施している「感染症発生動向調査」で報告を求められている感染症であり、平成26年9月19日から医療機関で発生した全例について保健所への届出が義務づけられています(5類全数届出疾病)。また、その原因菌株の提出協力を求められています。

当所では、市内の医療機関で検出されたCREの解析を行っており、2023年1月から12月の1年間に当所に搬入された感染症法上の届出対象41株及び届出対象外の13株(院内感染関連株、医療機関からの精査依頼株等)、計54株について結果を報告します。

菌株が分離された検体を種類別に図1に示しました。届出対象患者由来の菌株では、血液由来の株が多く、菌血症、敗血症の患者由来の菌株が多くなっています。

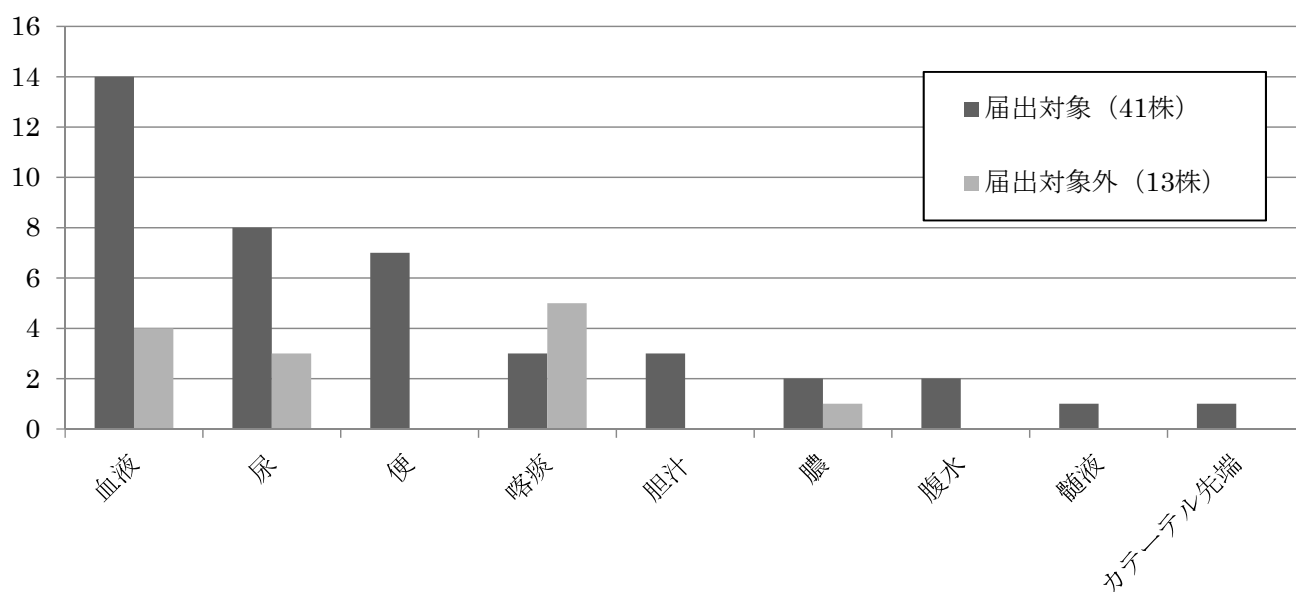


図1 検体別分離菌株数

次いで、菌株を菌種別に図2に示しました。届出対象株と届出対象外株合わせて、*Klebsiella aerogenes* が最も多く、次いで *Enterobacter cloacae* complex、*Klebsiella pneumoniae* が多い傾向でした。また、CREの中でもとりわけ公衆衛生上問題となるカルバペネマーゼ産生腸内細菌目細菌 (carbapenemase-producing Enterobacterales : CPE) であるかどうかを図3に示しました。その結果、*E. cloacae* complex は41% (7/17株)、*K. pneumoniae* は15% (2/13株)がCPEであることがわかりました。その一方、*K. aerogenes* の全株 (18/18株)はCPEではありませんでした。

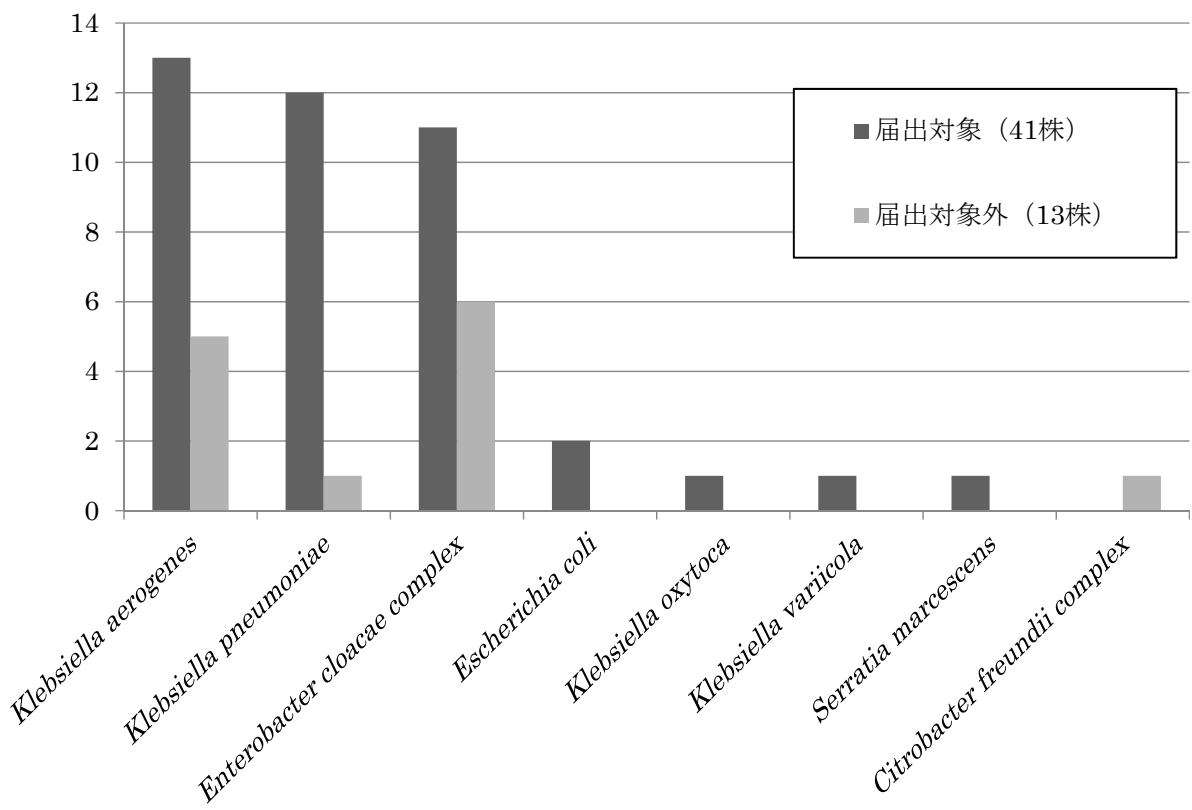


図2 菌種別分離菌株数

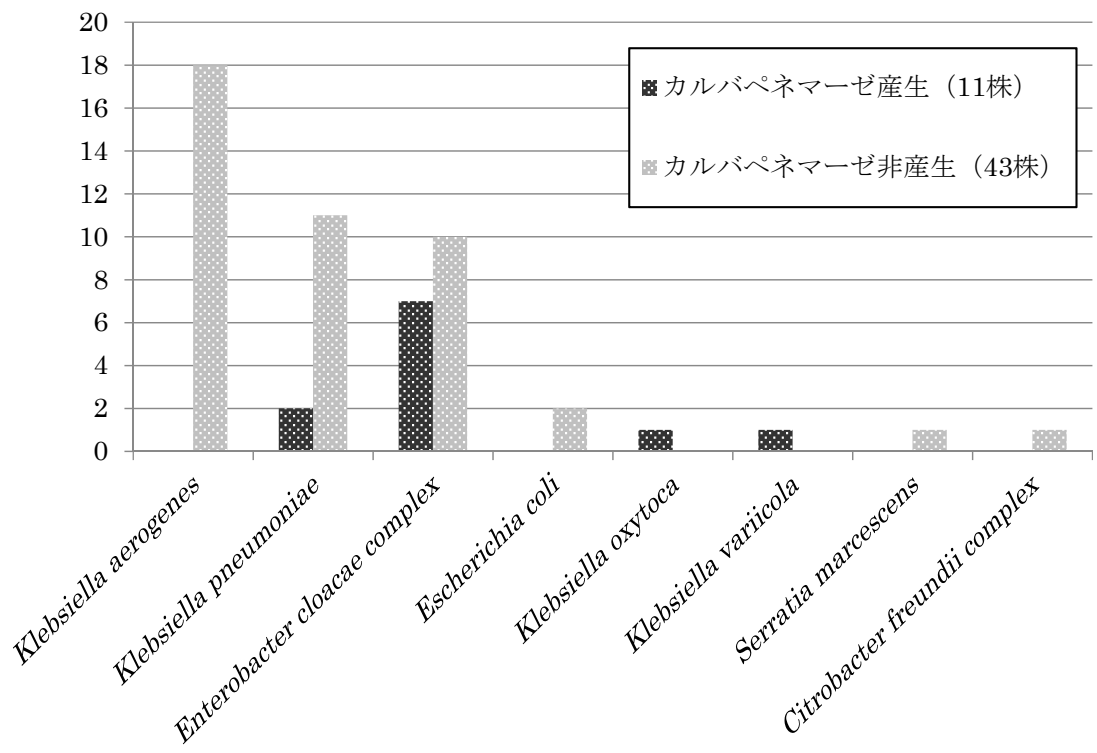


図3 菌種別カルバペネマーゼ産生株数

CPEはプラスミド上にカルバペネマーゼ(カルバペネム分解酵素)を産生する遺伝子を保有しており、その薬剤耐性遺伝子を解析することで、地域におけるCPEの割合、同じ遺伝子型の地域内拡散の有無、海外型CPEの分離状況等、地域での流行状況を把握することができます。2023年は、CPEであった11株のうち、IMP-1が9株、IMP型(配列解析で詳細な型別は決定できず)が1株、NDM-1が1株でした。IMP型は国内で最もよくみられるカルバペネマーゼ遺伝子型です。また、NDM型は海外型カルバペネマーゼ遺伝子と言われていましたが、近年、海外渡航歴のない検出例が増加しており、本市の事例の患者も渡航歴は無く、今後の動向を注視する必要があると考えています。

※感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律等の一部を改正する法律の施行に伴う厚生労働省関係省令の整備等に関する省令(令和5年厚生労働省令第79号)により、カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症からカルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症へ名称変更(令和5年5月26日施行)

【 微生物検査研究課 細菌担当 】

食品中の放射性物質検査結果(令和5年度)

平成23年3月に東日本大震災による福島第一原子力発電所事故がおき、市民の健康影響への不安に応え市内流通食品の安全・安心を確保するため、同年7月から食品中の放射性物質検査を行っています。

令和5年度に当所で行った食品の検査結果は表1～表3のとおりです。429検体中2検体(しいたけ(生)及びたけのこ各1検体)から放射性セシウム(Cs)が検出されましたが、基準値*は超えませんでした。

* 放射性 Cs の基準値(Cs-134 と Cs-137 の合計)

飲料水:10Bq/kg、乳児用食品:50Bq/kg、牛乳:50Bq/kg、一般食品:100Bq/kg

(厚生労働省告示第129号、130号 平成24年3月15日)

表1 検体の種類及び数並びに放射性Cs検出検体数

| 検体の種類 | 説明 | 検査検体数 | 放射性Cs検出検体数 |
|-----------|---------------|-------|------------|
| 市内産農産物 | 横浜市内産の農産物 | 10 | 2 |
| 市内産水産物 | 横浜市内漁港水揚げの魚介類 | 60 | 0 |
| 市内産畜産物 | 横浜市内産の原乳 | 4 | 0 |
| 市内量販店流通食品 | 横浜市内で流通している食品 | 11 | 0 |
| 小学校給食 | 米、麦及び牛乳 | 344 | 0 |
| 合計 | | 429 | 2 |

表2 検体の内訳

| 検体の種類 | 品名([]内は検体数) |
|-----------|--|
| 市内産農産物 | かき[1]、かぶ[1]、きゅうり[1]、こまつな[1]、米(玄米)[1]、しいたけ(生)[1]、たけのこ[1]、なす[1]、日本なし[1]、ばれいしょ[1] |
| 市内産水産物 | カナガシラ[6]、カマス[1]、クロダイ[1]、コショウダイ[2]、コノシロ[1]、シログチ[14]、スズキ[8]、タチウオ[18]、ホウボウ[5]、マコガレイ[1]、ムシガレイ[3] |
| 市内産畜産物 | 原乳[4] |
| 市内量販店流通食品 | きゅうり[1]、牛乳[2]、米(精米)[1]、清涼飲料水[3]、乳児用食品[2]、ミルク(粉)[1]、ミルク(液体)[1] |
| 小学校給食 | 牛乳[173]、米(精米)[104]、米(胚芽米)[26]、麦[41] |

表3 放射性Cs検出検体の検査結果

| 品名 | 検体数 (Cs検出数) | 検出値(Bq/kg) | | |
|---------|----------------|-------------|--------|------|
| | | Cs-134 | Cs-137 | Cs合計 |
| たけのこ | 1(1) | 不検出(<0.717) | 1.93 | 1.9 |
| しいたけ(生) | 1(1) | 不検出(<0.751) | 1.22 | 1.2 |

不検出の()内数値は、検出限界値

【 理化学検査研究課 環境化学担当 】

食品中のアフラトキシン検査結果（令和5年度）

アフラトキシンはアスペルギルス属等が産生するカビ毒の一種です。アフラトキシンには、アフラトキシンB1をはじめB2、G1、G2、M1などのいくつかの種類が存在することがわかっています。なかでもアフラトキシンB1は天然物でもっとも強力な発がん性物質であることが知られ、食品全般に対して総アフラトキシン（アフラトキシンB1、B2、G1、G2の合算）について10 $\mu\text{g}/\text{kg}$ の規制値が設けられています。また、アフラトキシンM1は、アフラトキシンB1に汚染された飼料を摂食した家畜の乳に含まれることが知られ、乳中のアフラトキシンM1について0.5 $\mu\text{g}/\text{kg}$ の規制値が設けられています。

今回は、令和5年5月及び令和6年2月に食品専門監視班が収去した市内流通食品の検査結果を報告します。

令和5年5月にアーモンド、イチジク、クルミ各1検体、ゴマ4検体及びピスタチオ1検体の計8検体について総アフラトキシン（アフラトキシンB1、B2、G1、G2の合算）の検査を行いました。

検査の結果、表1に示すとおり全て不検出でした。

また、令和6年2月に牛乳2検体についてアフラトキシンM1の検査を行いました。

検査の結果、表2に示すとおり全て不検出でした。

表1 総アフラトキシンの検査結果

| 食品の種類 | 検体数 | 検出数 | 結果 $\mu\text{g}/\text{kg}$ | 規制値 $\mu\text{g}/\text{kg}$ |
|-------|-----|-----|-------------------------------|--------------------------------|
| アーモンド | 1 | 0 | 不検出 | 10 |
| イチジク | 1 | 0 | 不検出 | 10 |
| クルミ | 1 | 0 | 不検出 | 10 |
| ゴマ | 4 | 0 | 不検出 | 10 |
| ピスタチオ | 1 | 0 | 不検出 | 10 |
| 計 | 8 | 0 | — | — |

(検出限界:1 $\mu\text{g}/\text{kg}$)

表2 アフラトキシンM1の検査結果

| 食品の種類 | 検体数 | 検出数 | 結果 $\mu\text{g}/\text{kg}$ | 規制値 $\mu\text{g}/\text{kg}$ |
|-------|-----|-----|-------------------------------|--------------------------------|
| 牛乳 | 2 | 0 | 不検出 | 0.5 |

(検出限界:0.05 $\mu\text{g}/\text{kg}$)

【 理化学検査研究課 微量汚染物担当 】

食品中の動物用医薬品検査結果（令和5年11月～令和6年2月）

動物用医薬品は動物の疾病の治療、予防及び発育促進の目的で使用されています。畜水産食品中に残留する動物用医薬品が人の健康に害を及ぼすことのないよう、厚生労働省は動物用医薬品について残留基準を設定しています。

当所では、市内流通及びインターネット購入品の畜水産食品について検査を行っています。今回は、食品専門監視班が令和5年11月及び令和6年2月に収去及びインターネットで購入した食品の検査結果を報告します。

11月には、さけ目魚介類2検体（アトランティックサーモン及びギンザケ）、その他の魚類5検体（ヒラメ）及びエビ2検体の計9検体について検査を行いました。また、2月には、牛乳2検体、鶏卵4検体及びはちみつ2検体の検査を行いました。

その結果、表に示すとおりヒラメ2検体からオキシテトラサイクリンを0.32ppm及び0.42ppm検出し、基準値（0.2ppm）を超過していました。

オキシテトラサイクリンはテトラサイクリン系の広域スペクトラム抗生物質です。世界各国でヒト用及び動物用医薬品として長く使われています。水産用としてはウナギ、ギンザケ、ヒラメ、ブリ、マアジ、マダイ等多様な養殖魚の疾病予防及び治療に使用されています。ヒラメでは連鎖球菌症の治療に使用されます。

表 検査項目、検査結果及び検出限界

| 検査項目 | 検査結果 | | | | | | 検出限界 |
|-----------------------------|--------------|--------------|-------------|-------------|-------------|---------------|-------|
| | 魚介類 | | | その他の食品 | | | |
| | さけ目 (2検体) | ヒラメ (5検体) | エビ (2検体) | 牛乳 (2検体) | 鶏卵 (4検体) | はちみつ (2検体) | |
| 【合成抗菌剤】 | | | | | | | |
| ニトロフラントイン | N.D. | N.D. | N.D. | — | — | — | 0.001 |
| フラゾリドン | N.D. | N.D. | N.D. | — | — | — | 0.001 |
| フラルタドン | N.D. | N.D. | N.D. | — | — | — | 0.001 |
| マラカイトグリーン | N.D. | N.D. | N.D. | — | — | — | 0.002 |
| ロイコマラカイトグリーン | N.D. | N.D. | N.D. | — | — | — | 0.002 |
| エンロフロキサシン(シプロ フロキサシンとの和) | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | — | 0.01 |
| オキシリニック酸 | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | — | 0.01 |
| オフロキサシン | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | — | 0.01 |
| オルビフロキサシン | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | — | 0.01 |
| オルメトプリム | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | — | 0.01 |
| クロピドール | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | — | 0.01 |
| サラフロキサシン | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | — | 0.01 |
| ジフロキサシン | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | — | 0.01 |
| スルファキノキサリン | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | — | 0.01 |
| スルファクロルピリダジン | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | — | 0.01 |
| スルファジアジン | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | — | 0.01 |
| スルファジミジン | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | — | 0.01 |
| スルファジメキシシ | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | — | 0.01 |
| スルファセタミド | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | — | 0.01 |
| スルファチアゾール | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | — | 0.01 |

表(続き) 検査項目、検査結果及び検出限界

| 検査項目 | 検査結果 | | | | | | 検出限界 |
|-----------------|--------------|---------------------------------|-------------|-------------|-------------|---------------|-------|
| | 魚介類 | | | その他の食品 | | | |
| | さけ目 (2検体) | ヒラメ (5検体) | エビ (2検体) | 牛乳 (2検体) | 鶏卵 (4検体) | はちみつ (2検体) | |
| スルファドキシシ | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | — | 0.01 |
| スルファピリジシ | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | — | 0.01 |
| スルファベンズアミド | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | — | 0.01 |
| スルファメキサゾール | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | — | 0.01 |
| スルファメキシピリダジシ | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | — | 0.01 |
| スルファメラジシ | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | — | 0.01 |
| スルファモイルダプソシ | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | — | 0.01 |
| スルファモノメキシシ | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | — | 0.01 |
| スルフィソゾール | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | — | 0.01 |
| スルフィソミジシ | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | — | 0.01 |
| ダノフロキサシシ | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | — | 0.01 |
| チアンフェニコール | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | — | 0.01 |
| トリメプリシ | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | — | 0.01 |
| ナイカルバジシ | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | — | 0.01 |
| ナリジクス酸 | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | — | 0.01 |
| ノルフロキサシシ | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | — | 0.01 |
| ピリメタシシ | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | — | 0.01 |
| ピロミド酸 | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | — | 0.01 |
| フルメキシシ | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | — | 0.01 |
| マルボフロキサシシ | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | — | 0.01 |
| ミロサマイシシ | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | — | 0.01 |
| 【抗生物質】 | | | | | | | |
| OTC、CTC及びTCの和 * | — | — | — | N.D. | N.D. | — | 0.02 |
| オキシテトラサイクリシ | N.D. | { 0.32(1) 0.42(1) N.D.(3) | N.D. | — | — | N.D. | 0.02 |
| クロルテトラサイクリシ | N.D. | N.D. | N.D. | — | — | N.D. | 0.03 |
| テトラサイクリシ | N.D. | N.D. | N.D. | — | — | N.D. | 0.02 |
| クロラムフェニコール | N.D. | N.D. | N.D. | — | — | N.D. | 0.005 |
| 【寄生虫用剤】 | | | | | | | |
| レバミゾール | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | — | 0.01 |
| 【殺虫剤】 | | | | | | | |
| クマホス | — | — | — | — | — | N.D. | 0.01 |

単位:ppm N.D.:不検出 —:実施せず ()内は検体数

*:オキシテトラサイクリシ、クロルテトラサイクリシ及びテトラサイクリシの和

【 理化学検査研究課 微量汚染物担当 】

衛生研究所ウェブページ情報（令和6年3月）

横浜市衛生研究所ウェブページは、平成10年3月に所独自のウェブサイトとして開設されました。現在は、本市ウェブサイトと統合され、感染症情報、保健情報、食品衛生情報、生活環境衛生情報、薬事情報を提供しています。今回は、当ウェブページにおける令和6年3月の追加・更新記事について報告します。

1 追加・更新記事

令和6年3月に追加・更新した主な記事は、6件でした。

| 掲載月日 | 内容 |
|-------|------------------------|
| 3月7日 | 横浜市インフルエンザ流行情報 24号 |
| 3月14日 | 横浜市インフルエンザ流行情報 25号 |
| 3月19日 | 感染症に気をつけよう(3月号) |
| 3月22日 | 横浜市インフルエンザ流行情報 26号 |
| 3月25日 | 横浜市衛生研究所年報 第62号(令和4年度) |
| 3月28日 | 横浜市インフルエンザ流行情報 27号 |

2 記事紹介

横浜市インフルエンザ流行情報

<https://www.city.yokohama.lg.jp/kenko-iryo-fukushi/kenko-iryo/eiken/kansen-center/rinji/influenza-rinji-2023.html>

感染症に気をつけよう

<https://www.city.yokohama.lg.jp/kenko-iryo-fukushi/kenko-iryo/eiken/kansen-center/shimin/kiwotukekyou.html>

横浜市衛生研究所年報

<https://www.city.yokohama.lg.jp/kenko-iryo-fukushi/kenko-iryo/eiken/gaiyo/annualreport.html>

【 感染症・疫学情報課 】

横浜市感染症発生動向調査報告（令和6年3月）

《今月のトピックス》

- インフルエンザや新型コロナウイルス感染症などの報告が、依然として続いています。咳エチケットや手洗いなど、基本的な感染対策を心がけましょう。
- 梅毒は20歳代を中心として幅広い年齢層で発生しており、注意が必要です。

◇ 全数把握の対象 <2024年3月期に報告された全数把握疾患>

| | | | |
|--------------------|----|-----------------------|-----|
| E型肝炎 | 2件 | 後天性免疫不全症候群(HIV感染症を含む) | 2件 |
| レジオネラ症 | 4件 | 侵襲性インフルエンザ菌感染症 | 1件 |
| アメーバ赤痢 | 2件 | 侵襲性肺炎球菌感染症 | 1件 |
| カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症 | 3件 | 水痘(入院例に限る) | 1件 |
| 急性脳炎 | 2件 | 梅毒 | 19件 |
| 劇症型溶血性レンサ球菌感染症 | 3件 | 百日咳 | 1件 |

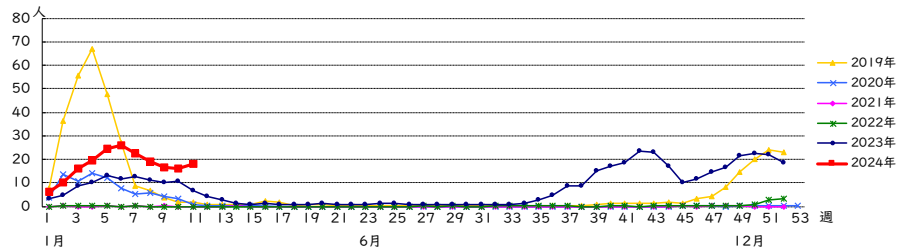
- 1 **E型肝炎**:50歳代～70歳代で、経口感染と推定される報告が1件、感染経路等不明の報告が1件です。
- 2 **レジオネラ症**:40歳代～80歳代で、水系感染と推定される報告が2件、感染経路等不明の報告が2件です。
- 3 **アメーバ赤痢**:40歳代～60歳代で、いずれも感染経路等不明です。
- 4 **カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症**:40歳代～90歳代で、いずれも感染経路等不明です。
- 5 **急性脳炎**:いずれも10歳未満で、病原体は不明、感染経路等も不明です。
- 6 **劇症型溶血性レンサ球菌感染症**:70歳代～80歳代で、血清群はA群が1件、B群が1件、G群が1件です。創傷感染と推定される報告が1件、感染経路等不明の報告が2件です。
- 7 **後天性免疫不全症候群(HIV感染症を含む)**:40歳代～50歳代で、性的接触(同性間)と推定される報告が1件、感染経路等不明の報告が1件です。
- 8 **侵襲性インフルエンザ菌感染症**:70歳代(ワクチン接種歴不明)で、感染経路等不明です。
- 9 **侵襲性肺炎球菌感染症**:90歳代(ワクチン接種歴1回)で、感染経路等不明です。
- 10 **水痘(入院例に限る)**:90歳代(ワクチン接種歴不明)で、飛沫・飛沫核感染と推定されています。
- 11 **梅毒**:20歳代～80歳代で、早期顕症梅毒Ⅰ期7件、早期顕症梅毒Ⅱ期7件、晩期顕症梅毒1件、無症状病原体保有者4件です。性的接触による感染と推定される報告が16件(異性間13件、同性間1件、詳細不明2件)、感染経路等不明の報告が3件ありました。
- 12 **百日咳**:10歳代(ワクチン接種歴4回)で、感染経路等不明です。

◇ 定点把握の対象

| 報告週対応表 | |
|-----------|-------------|
| 2024年 第9週 | 2月26日～3月 3日 |
| 第10週 | 3月 4日～3月10日 |
| 第11週 | 3月11日～3月17日 |

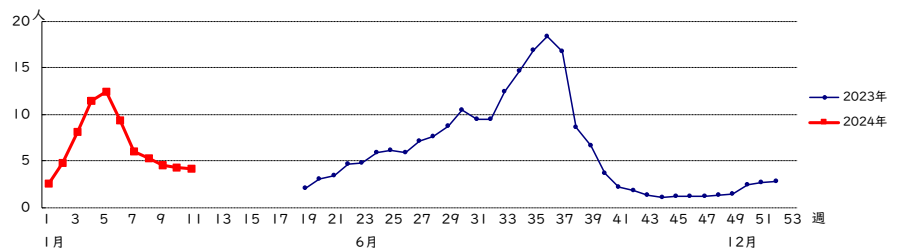
1 インフルエンザ

2023年第39週に流行注意報発令基準値(定点あたり10.00)を上回りました。2020年以降の動向と比較すると報告数が多く、第11週は18.22です。詳細は、横浜市インフルエンザ流行情報26号をご覧ください。



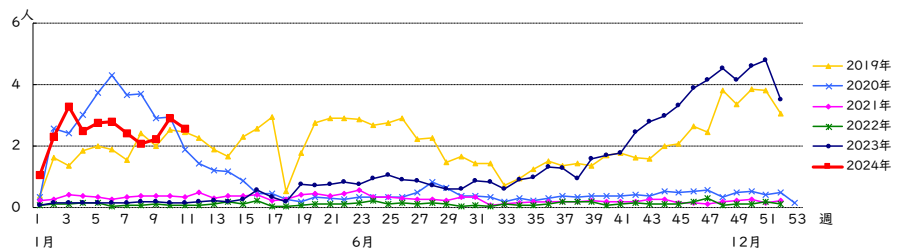
2 新型コロナウイルス感染症

2024年第1週以降、増加傾向でしたが、第6週以降は減少傾向に転じ、第11週は4.19です。



3 A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

2024年第4週以降、過去5年と比較しやや多い状態で推移しています。第11週は2.55です。



4 性感染症(2024年2月)

| | | | | | |
|------------|--------|--------|---------------|--------|--------|
| 性器クラミジア感染症 | 男性:22件 | 女性:18件 | 性器ヘルペスウイルス感染症 | 男性: 6件 | 女性:12件 |
| 尖圭コンジローマ | 男性: 5件 | 女性: 2件 | 淋菌感染症 | 男性:14件 | 女性: 3件 |

5 基幹定点週報

| | 第9週 | 第10週 | 第11週 |
|-------------------|------|------|------|
| 細菌性髄膜炎 | 0.00 | 0.00 | 0.00 |
| 無菌性髄膜炎 | 0.00 | 0.25 | 0.00 |
| マイコプラズマ肺炎 | 0.25 | 0.00 | 0.00 |
| クラミジア肺炎(オウム病を除く) | 0.00 | 0.00 | 0.00 |
| 感染性胃腸炎(ロタウイルスに限る) | 0.00 | 0.00 | 0.00 |

6 基幹定点月報(2024年2月)

| | | | |
|-------------------|----|----------------|----|
| メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症 | 9件 | ペニシリン耐性肺炎球菌感染症 | 0件 |
| 薬剤耐性緑膿菌感染症 | 0件 | - | - |

◇ 病原体定点からの情報

市内の病原体定点は、小児科定点:8か所、インフルエンザ(内科)定点:4か所、眼科定点:1か所、基幹(病院)定点:4か所の計17か所を設定しています。

検体採取は、小児科定点とインフルエンザ定点では定期的に行っており、小児科定点は8か所を2グループに分けて毎週1グループで実施しています。

眼科と基幹定点では、検体採取は対象疾患の患者から検体を採取できたときのみ行っています。

〈ウイルス検査〉

2024年第9週～第12週に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点41件、内科定点7件、基幹定点4件、定点医療機関外1件でした。

4月8日現在、表に示した各種ウイルスの分離21株及び遺伝子12件が同定されています。

表 感染症発生動向調査におけるウイルス検査結果 (2024年第9週～2024年第12週)

| 分離・検出ウイルス | 主な臨床症状等 | | | |
|--------------------------|---------|--------|--------|---------|
| | インフルエンザ | 上気道炎 | 下気道炎 | ウイルス感染症 |
| インフルエンザウイルス AH1pdm09 | - 1 | | | |
| インフルエンザウイルス B型 (ビクトリア系統) | 20 - | | | |
| アデノウイルス 3型 | | 1 1 | | |
| ヒトメタニューモウイルス | | | - 5 | |
| ボカウイルス | | | - 1 | |
| ヒトコロナウイルス* | | - 1 | - 1 | - 1 |
| RSウイルス | | | - 1 | |
| 合計 | 20 | 1 | 0 | 0 |
| | 1 | 2 | 8 | 1 |

上段:ウイルス分離数 下段:遺伝子検出数

*ヒトコロナウイルス:HCoV 229E or NL63、HCoV OC43

【 微生物検査研究課 ウイルス担当 】

〈細菌検査〉

4月期(2024年第9週～第11週)の「菌株同定」の検査依頼は、基幹定点からカルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症3件、劇症型溶血性レンサ球菌感染症3件、メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症3件でした。非定点から薬剤耐性緑膿菌感染症2件でした。保健所からの検査依頼は、腸管出血性大腸菌感染症2件、カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症17件、レジオネラ症1件、侵襲性インフルエンザ菌感染症1件、劇症型溶血性レンサ球菌感染症1件、バンコマイシン耐性腸球菌感染症2件でした。

「分離同定」の検査依頼はありませんでした。

「小児サーベイランス」の検査依頼は発熱・咽頭炎等2件でした。

表 感染症発生動向調査における病原体調査(2024年第9週～第11週)

| 菌株同定 | 項目 | 検体数 | 血清型等 | |
|-----------------|--------|--|---|-------------------------------|
| 医療機関 | 基幹定点 | カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症 | 3 <i>Enterobacter cloacae</i> complex (2)、 <i>Klebsiella aerogenes</i> (1) | |
| | | 劇症型溶血性レンサ球菌感染症 | 3 A群溶血性レンサ球菌 TUT (1)、A群溶血性レンサ球菌 T1 (1)、G群溶血性レンサ球菌 (1) | |
| | | メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症 | 3 <i>Staphylococcus aureus</i> (3) | |
| | 非定点 | 薬剤耐性緑膿菌感染症 | 2 <i>Pseudomonas aeruginosa</i> (2) | |
| | | 腸管出血性大腸菌感染症 | 2 O157:H7 VT2 (1)、Og113:Hg21 VT2 (1) | |
| | 保健所 | カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症 | 17 <i>Enterobacter cloacae</i> complex (16)、 <i>Klebsiella pneumoniae</i> (1) | |
| レジオネラ症 | | 1 <i>Legionella pneumophila</i> SG1(1) | | |
| 侵襲性インフルエンザ菌感染症 | | 1 <i>Haemophilus influenzae</i> a型 (1) | | |
| 劇症型溶血性レンサ球菌感染症 | | 1 B群溶血性レンサ球菌 (1) | | |
| バンコマイシン耐性腸球菌感染症 | | 2 <i>Enterococcus faecium</i> (2) | | |
| 小児サーベイランス | 材料 | 臨床症状 | 検体数 | 同定、血清型等 |
| 小児科定点 | 咽頭ぬぐい液 | 発熱、咽頭炎、発疹、紅斑 | 2 | A群溶血性レンサ球菌 T4 陽性 (1)、培養陰性 (1) |

【 微生物検査研究課 細菌担当 】